

『森林の少年』(六)

D・H・ロレンス & M・L・スキナー 著

山田晶子 訳

1

ジャックが、朝目を覚ました時、二つのことが胸中で争っていた。一つは、自分が全てを捨て去つたのだということ、子供時代とは決別したのだということ、そして自立した人生に入つていくのだということであり、もう一つは、誰かがラテン語を呟き木のダンベルをかちかち言わせているな、ということであつた。

ジャックは目を開けた。隠れ家には四台のベッドがあつた。二台のベッドの間に十三歳くらいの痩せた男の子が立つており、ダンベルを振り回していた。そして小さな男の子たちに向かい合つていた。子供たちはラテン語の決まり文句を繰り返してはいたが、忠実に年上の少年の真似をしていた。三人共がズボン吊りの付いたゆつたりした半ズボンを履いていて、

シャツを着ていた。

オオー、ヴェニ、彼等の腕はスマートに上がった、——ヴィデイ、拳骨が水平になつた、——ヴィシ、拳骨が脇へ下がつた。ジャックは一人で微笑んで再びうとうとした。夜明けまぢかであつた。彼はぼんやりと藁葺きの屋根をばたばた打つ雨音に氣付いていた。

「今朝は起きないのか？」

トムが軽蔑するようにそばに立つていた。子供たちはもう裸のまま腕をむき出しにして雨の中へと飛び出していた。

「朝なのか？」

と、ジャックは伸びをしながら訊いた。

「まだだ。俺たちは馬つこに餌をやりに行くんだ。来いよ。」

「どこで顔を洗うんだ？」

「井戸で。元気が良さそうだな。服を着ろ。家の男たちはレッ

ズに住んでいる。俺たちは、朝はちゃんとしているように見えなくて是不ならない。」

ジャックは元気が良いようだった。それで井戸のそばに置いてある錫の皿で顔を洗うために外へ出た。雨は小やみになっていたが、外へ出れば濡れてしまうと思われた。

彼が完全に目が覚めてしまった時には、空は明るくなっていた。晴天の朝であった。大気には、花咲く茂みの新鮮な香りが満ちていた。エリスが庭で育てているワトル、スパイリニア、ジンチョウゲ、ライラックであった。すでに太陽が暑く照っていた。

その家は、低い石作りで、周囲に数本の木が立っていた。全ての生活は、裏側で進んでいた。裏にはポンプがあり、いろいろな庭があり、離れ家があった。開けた場所が広がっていた。そして二、三本の巨大なゴムノキがあった。空はすでに青く、巨大な孤木の下にはもやが掛かっていた。

裏庭ではたくさんの小羊が囲いに入れられ、鳴いていて、ミルクをもらおうとジャックを必死に信頼して見つめていた。彼は、手を古いツイードの服のポケットに突っ込んで歩きながら、服装が派手かな、と感じ、自分を少し場違いな存在だと思っていた。雌牛は柱に綱で繋がれているか、または囲いを付けられた庭に放たれたまま立っていた。そして混血のティムとレニーは、静かに乳を搾っていた。オーストラリアの朝には重く純粹な沈黙が満ちていた。ジャックは少し離れた所に立つて

いた。一匹の猫が庭をすばしこく横切つて、奇妙な形の松の木によじ登った。気を散らされた一匹の老いた牛があちこちへ動いた。

「おい！あの荷馬車の馬つこが馬草納屋に入り込まないように止めてくれ。ここへ連れてきてくれ。それからあの茸毛の馬の綱に気をつけてくれ。綱を噛み切つて自由になろうとしている。滑りやすいから気をつけてくれ。」

と、トムがいらいらしながら叫んだ。

トムの横柄な命令には、親愛と親密さの感覚が混じっていた。ジャックは荷馬車の馬つこの側へ走った。彼はトムと他の者たちを好きにならざるを得なかった。彼等はそんなにも変わつていてナイーブで、奇妙なことに見捨てられた感じがあつた。この新しい国の浮浪児のような感じがした。ジャックは常に浮浪児や迷つた人々に心を惹かれた。彼等は、彼が威張られても気に掛けない唯一の人たちであった。

子供たちは、いろいろな仕事をしながら金切り声の澄んだ声で、一種の宿無し子の奔放さを放つて歌を歌った。男の子レニーは、牛の側で乳を搾りながら、突然音楽的な叫び声を上げて、双児の悪戯つ子の金切り声を黙らせた。また彼らは、様々に手当りしだいにさえざる小鳥たちに似て、頭に浮かんだあらゆること、歌や詩やナンセンスを歌っているようにみえた。

「青い空、新鮮な空気、いつも自由なもの

僕も頭上の青い空や下方の青い海と一緒に
いたい所にいる――

すると牛たちの側のレニーが叫ぶ

そしてこの子供時代はかくして

双児たち

僕は決してあのつまらない岸边へ行つたことがない

ただどあの大きい海をますます愛している――

再びレニーが突然命令するように叫ぶ。

僕をその柔らかな黒い目で喜ばせようとする

ガゼルを決して愛したことはない

だけどヤツが僕をよく知ろうと、愛そうと

やっつて来た時――

ここで双児はあたかも催眠術に罹つたかのように、吠えた――
「ヤツは必ず死ぬ。」

彼らは、迷つた者のように、新しい静かな朝にこの耳障りな

叫び声を出し続けた。ジャックは一人で笑つた。だが彼らは
まったく真剣であつた。年上の者たちは唾のごとく黙つてい
た。ただ幼い者たちだけがこのような大騒ぎをしていた。それ
はこの国の偉大な沈黙に対する一種の抗議であつたのか？ そ
れは騒音のない対しよ点における彼らの若い失われた努力で
あつたのか？ 対しよ点では騒音の無さがついに宿命のように
思われるのか？ 二人は、不可解に棄捨された野生の小さな迷
子になつた何かのように大声で叫んでいた。それはジャックを
喜ばせた。

2

彼らは全員が再び黙し、裏戸のペパーミントの木の下に集
まつた。そこでは母親がみんなのためにお茶を玉じやくしです
くつてマグに取り分けていた。母親というのはエリスのおかみ
さんのことであつた。彼女の目にはなおもやつれた漠然とした
表情が宿り、疲れた物腰をしていた。そして台所にいる時でも
木の下にしゃがみこんでいるグループにパイを運んでくる時で
も誰にも注意を払つていなかった。誰かが「母ちゃん、もつと
お茶が欲しい！」と言つた時は黙つて紅茶を注いだ。ジャック
はそれほど熱心に観察をしていた訳ではなかった。しかし彼は
エリスのおかみさんの沈黙と「やつれた」表情には衝撃を受け
ていた。

トムがやっつて来て、木の幹に体をもたせかけながら立ち上

がった。レニーは、マグを持って、黙ったまま新参者を見ながら、反対側の丸太に腰掛けていた。別の丸太には二人のわんぱく坊主たちが、がっしりした野性的な子供たちが、ジャックが初めて見た時のように裸足で、脚もむき出しで、腕もむき出しで座っていたが、着ているものは木綿の短いズボンと木綿のアンダーシャツであった。そしてズボン吊りも。最後の物がはるかにもっとも重要な衣類と思われた。レニーは服を着ていると言つてもよいし着ていないと言つても同じようなものだった。

一方トムはおまけに長靴を履いていた。木綿の衣類から出ているむき出しの腕は陽に焼けていてすべすべしていた。そして彼らは子供や若者を奇妙に無防備に見つめていた。紺色の斑点があるエプロンを着け、赤いリボンを髪に結んだ十二歳ぐらいの少女が双児の近くで小さな丸太に腰掛けていた。彼女は母親と同じように黙っていた——が、まだ「やつれて」はいなかった。「オグとマゴグをどう思う?」

トムが、マグで双児を指しながら言った。

「二人ともチビだから大きくなるように期待されているんだよ。」

ジャックは何を言つたらよいのかわからなかった。温かい気持ちを見せるために微笑もうとした。

「あれはケイティだよ。」

トムが少女を指したが彼女は愚かしく見えた。

「彼女はレニーよりも年下なんだけど体は同じぐらい大きい

んだ。レニーも小柄だから。チビで生意気なヤツなんだ。年の割に生意気なんだ。十四歳だよ。つけあがらせたら駄目だ。言っておくけどね。」

「できるならしてみろ!」

レンが意地悪な顔をして呟いた。

それからレニーがかん高い声でトムに次のように話し掛けた時、浮浪児のような生意気をむき出しにして、ジャックを無視しているように見えた。

「それで早起きの公爵様は一体誰なんだい? 教えてくれないかい?——全く、たいした礼装を召していらつしやるもんだ。」

「おい、レン、ちんぷんかんぷんな言葉は止めろ!」

と、トムが注意した。

「とにかく、俺をつけあがらせるな、とあんたが言わなきゃならない人間は一体誰なんだい。」

「怒らせるつもりは全くないんだよ。」

と、ジャックはやさしく言った。

「だが腹が立つたぜ。」

と、レニーはどす黒い表情で言つたので、ジャックは我知らず気持ちが高ぶつた。

「礼儀正しい言葉を頭に入れておけよ。さもないと頭を叩くぞ!」

と、彼は答えた。彼とレニーは睨み合った。

レニーは、孤独な少女に似た不思議な哀感を湛えた美しい小

さな顔をしていて、黒色にも変わる灰色の目をしていた。ジャックは彼に対して切ない愛を感じ、同時にモニカに似た雌ライオンの仔を思い出した。多分彼女もまた同じ不思議な哀感を持つているのだろう。一人で森を油断なく駆ける若い動物に似ていた。なぜこれらの子供たちはこんなにも母親や父親を知らず、ひどく独立しているように思われるのか？まさにジャックが自分もそうだと感じている状態と同じであった。だが彼は哀感を抱いていなかった。

レニーは突然奇妙なことに微笑んだ。そしてジャックは自分が彼の心を受け入れられたのだと理解した。奇妙だな！今の今まで二人は互いに相手を閉め出していたのだ。だがレンは戸を開けた。ジャックは彼の愛くるしさと哀感を生々しく知った。そして彼をまた愛したのだった。だがなおもよそよそしかった。そしてなおもそこにはモニカの遠くから見つめる視線が混ざり合っていた。

「結構だ。あいつに言つてやれ。」
と、トムが言った。

「ここで俺の言うことには口答えはしてならないし、告げ口もしてならないのだ。これがこの場所でのモットーだ。」

「トム様に従え、喜ばせよ。」

そうすれば神はお前を愛し天使もお前を助ける」

と、レニーが、丸太の上を裸足でバランスを取りながら爪先立ちして歩き、答えた。そして空で悪鬼が聞いているかのよう、漠然とした横柄な態度で歌を繰り返した。

「黙れ！お前は！」

と、トムが言った。

「お前はボスたちをレッズへ連れていくはずだな。ジャックを連れて行つて紹介しておくれ。」

「いいとも。」

と、レンは歩きながら大きなパイの一切れを口に頬張った。

「ジャック、馬に乗れるかい？」

ジャックは、そんなに上手に乗れるわけではなかったので答えなかった。

3

レンは四頭の大きな馬を解き放つて裏庭へ引き出した。そしてジャックの手にロープを渡した。その子供は馬が毛むくじらの脚で立っている時、大きな生物の鼻の下を非常に自信を持って歩いた。そして彼は小人のようだったし、茶色いむき出しの腕とむき出しの脚と足と生き生きとした顔を見ると、彼は非常に「やさしげ」に見えた。ジャックの心はやさしい気持ちになった。

「今まで長靴を履いたことがないのかい？」

彼は訊いた。

「ないさ。あのガキたちもね。だけどあいつらを責めはしないよ。母ちゃんが送ってくれた一番新しい長靴は堆肥が置いてあるいたるところで見つかったんだ。だからじいさんは、もう長靴を買わないし良い仕事も見つからないだろうと言った。俺を怖がらせる物は、とげとげの雑草だけだ。道のいたるところに生えているんだ。その雑草を見たことあるかい？」

レンはどつしりした馬を引き出していた。彼は道で凝視し始めた。馬は小さな素早い人物の真後ろを進行していた。それから彼は、髪を突き出した一種の顔を持っているような奇妙な三方向のある木の節を見つけた。

彼は変な子供で、細切れのラテン語と詩の文句を言った。ジャックは、彼が自意識を持たず詩を引用することを恥ずかしがっていないことを不思議に思った。彼は、詩の断片を口にすることが自然なことであるかのように、それらを歌ったのだ。彼らは馬を別の厩へ導いて行った。レンはまた綱をジャックに渡し、姿を消し、鞍を付けた牧畜馬を引いて戻って来た。その馬の綱を持って、彼は猿のように、大きな馬の頭の首によじ登った。

「どの馬に乗りたいかい？」

彼はジャックに高みから訊ねた。

「俺は三本の綱を持って、ルーシーを導いて行く。あんたは別の三本を持ってくれ。」

そこで彼は三本の端綱を受け取った。

「僕は歩くよ。」

と、ジャックは言った。

「好きにしろよ。歩けば簡単に門を開けられる。」

その通り。レンは喜びであった。帰り道で、ジャックがルーシーの鞍に乗っていた時、レンは彼の後ろに飛び乗って馬の尻の上に立って、両手をジャックの肩に掛けて叫んだ。

「行け——！」

最初の門の所で彼は一滴の水のように滑り落ちてまた馬に飛び乗ったが、今度は馬の尾の方を向いてジャックに背中を向けて座った。そして気持ち良さそうに口笛を吹いた。

突然口笛を吹き止めて言った。

「あんたはばあちゃんと医者以外は全員に会ったんだね。医者は俺にいろいろと教えてくれるんだ。変な奴だよ。必要な時にいつもいないんだ。だが本物の医者だよ。死亡書に署名すれば誰も文句を言わないんだ。あんたが殺人を犯しても彼を味方につければ決して絞首刑にならないよ。彼は死体は自然死だつたと言うからね。」

「死体が死ぬなんて知らなかったよ。」

と、ジャックは笑いながら言った。

「そうかい？ すぐに分かるさ。——ばあちゃんは死体も同然さ。——だけど彼女は死にたがっていないんだ。おじいちゃんの墓に『孤独になつてしまったが、希望がなくはない』と書いたんだ。だからみんなは彼女が再婚するだろうと思つている。」

「だけど決してしないよ。——あんたはイギリスの学校へ行ったのかい？」

「そうだよ。」

「シルクハットをかむつたことある？」

「一度か二度。」

「大変だね！——俺は学校へは決して行きたくないね。神様が助けてくれるだろう。俺は行くようなことになれば恥ずかしさと不面目さのために死ぬだろうよ。さやの中の黒い小さな豆のように整列させられて無意味なことを学ばせられるなんて。ラケットを見てみなよ。高校からケンブリッジへ進んでお金を儲けるようになった。それを無駄遣いしている。人生を無駄遣いしている。今俺に教えているが、唯一の意味あることといつたらこれだけさ。」

少し沈黙があつて、ジャックは訊いた。

「ラケット先生って誰だい？」

「ろくでなしだよ。落ちぶれ果てたろくでなしさ。罪を犯したんだ。どんな罪かは知らないけど。でも魂を消耗しているんだ。」

4

ジャックは話をつなぎ合わせようとしたが無駄だった。当惑があつた。それで彼はそのままにしておいた。彼には、彼ら全員のままに中核に同じ当惑するあいまいさが存在していると思

われた。エリスさん、エリスのおかみさん、トム、そして使用人達——彼らは全員があのからつぼの当惑するあいまいさを中心に抱いていた。多分レニーがもつともしつかりしていた。他の者たちはただ仕事に従事し得ているだけだった。それ以上何もなかった。

ジャックは、トムとレン以外にはまだ誰とも友だちになつていなかった。オグとメグは彼に決して返事をしなかつた。二人はただにやにやし体をくねらすだけだった。またケイティがいた。そして太つた青い目をした小柄な男の子のハリーがいた。そしてまたパースからやつてきた絹綿髪のエリーがいた。

そしてみんながきちんとした朝食を取つていた二日目の朝、父親が突然言つた。

「母さん！新しい水仙の球根はどこにあるか知つているかね？ここへ戻つたら植えようと待ち焦がれていたんだが。」

「ヴェランダの端つこの格納庫に、あんたが仕舞うのを見てからこのかた、見ていないよ。」

「しかし、ないんだよ。」

死のごとき沈黙。

「それつてタマネギに似ているの？」

オグが訳知り顔に耳をそばだてて訊いた。

「そうだと！見たのかい？」

父親がきつとして訊ねた。

「赤ん坊がそれを食べているのを見たよ、父ちゃん。」

オグが静かに答えた。

「わしがイギリスから持ってきた球根なんだ。何とまあ！なんであのいたずら好きの猿ツ子をほったらかしにしておいたんだね、母さん！初めて持った貴重な球根だったのに。それに——母さん！それらは毒かもしれないよ。」

両親は互いの顔を見、それから元気な赤子を見た。周囲には肝を潰したような驚きの雰囲気か漂っていた。母さんは食卓用オイルが入れてある長い不快な青い瓶を手に取って、無理矢理スプーン一杯を悲鳴を挙げている赤子に飲ませた。父さんは赤子の苦悶を見ていられなくて、急いでその場を離れた。彼は、ヴェランダの小屋へ球根を探しに出かけた。トムは「おお、大変！」と叫んで呆然としたまま座り込んだ。ケイティは、飛び上がり、告げ口をしたオグを「シャリ！」と打った。するとマゴグは、オグに触るな、とケイティに飛びかかった。ジャックは、客であるのでこの家族には慣れていないため、少し困惑していた。

この間、レニーは黙ってマトンチョップを食べ続けていた。絹綿状の髪をしたエリーは、独り言を言いながらよちよちと歩いていた。彼女は一生懸命戻って来て、腹這いになって椅子の上のたのたと進み、何とか登った。そして二つのげんこつをテーブルの上に置いて、かじられたタマネギのような根をいくつか掴んだ。

「父ちゃん、あれじゃないの？彼女は食べていないよ。今朝

取り出して、吸っていたんだ。だから僕はそれらを彼女から取り上げて、父ちゃんのために隠しておいたんだ。」

「父ちゃんは、水仙、と言うべきだったんじゃない？」

レンはコーヒーマグから顔を上げ、カップの中から喋っている人間のようなうつろな声で訊ねた。

誰も答えなかった。その赤子は、食卓用のオイルを浴びて輝いていた。ジャックは、茫然自失のような状態で座ったままだった。誰もが、抑圧されたように不穏な沈黙のままマトンチョップを食べていた。そして巨大な厚切りパンを食べていた。

すると、憂鬱そうな身なりの良い若い紳士が入ってきたが、かれはダゲレオタイプで撮られた憂鬱そうな若い紳士に見えた。彼はゆつくりと黙ったまま入って来て、一言も話さないうま、椅子を引いてテーブルに着いた。ケイティは、彼の朝食として冷めないようにと炉端の上に置いてあった皿を取りに行った。それから彼女はまた座った。食事の雰囲気は以前にも増して抑圧的になった。誰もが、早く去りたいと思つて、急いで食べていた。

するとおばあさんが居間へ通じているドアを開けて、ものすごく年を取った婦人のようにそこに立った。動かないでただ見つめながらそこに立っていた。幽霊のように。ジャックの血液は冷えた。少年たちは空になった皿を押し退けて、素早くヴェランダへ、戸外へ出て行った。ジャックも、いつも膝の上に置

いていた帽子を掴んで彼らに従った。

レンはシャツを脱ごうとしていた。少年たちは食事時にはシャツを着ていなければならなかったのだ。

ここは未知の新しい国であつた！ ジャックは当惑の度を深めていった。また彼は、この家族に対して一種の情熱的な愛を抱いた——野蛮人が自分の部族に対して抱くに違いないような。彼は絶対にこの家族を離れないだろうと感じていた。彼はいつも彼らの近くに在るに違いない、いつも彼らと親密な接触をしているに違いない。しかしながら彼ら全部をほんの僅かではあるが恐れていた。

第5章 小羊たちの帰宅

1

一ヶ月後、トムとレニーは葦毛の馬ビルとリルを連れて、少女たちを迎えに出かけた。それまでずっと雨が降り続いていたので、ジャックはたいは小屋の中で小麦用の麻袋を繕いながら毎日を過ごしていた。今や彼は、厚手の綿のズボンと色付きのシャツと灰色の毛の靴下と胴色のブーツを身につけていた。農地を耕しに出かけたときは、トムの助言によって「ラステング」された靴下を履き、外には何も履いていなかった。彼のツイードのコートは、こじんまりとした部屋の壁に掛けて

あり、上物のズボンとベストはベッドのマットレスの下に置いてあつた。彼が持つて来た唯一の役に立った衣類は、農業大学校時代の古い乗馬用ズボンだけであつた。

トム式に刈り込んだ髪の後ろには、古いフェルト帽子があつた。このようにして彼は何時間も座り込み大きな針棒で麻袋を縫っていた。確かに、不幸ではなかつた。この家族に一種の情熱を抱いていた。この家族はほとんど彼の弱点であつた。彼は、この家族とここにいななければならないのだと感じていた。そうすれば何ごとも問題ではなかつた。父さんと母さんは、黙した控えめなその家の柱であつた。トムは重要な若者であつた。レニーはこの場所の魂であつた。オグとマゴグはやんちゃな生き物であつた。そしてジャックが好きになれないハリーがおり、また世話をしなければならぬ幼い女の子たちがいた。ラケットト医師は、落ち着かない幽霊のようにうろつき回つた。そしてばあさんが自分の部屋にいた。そして今、少女たちが帰宅しようとしていた。

ジャックは、この家族に沈み込んで自分の個性を溶かしてしまつた、決して逃げだせないだろうと感じていた。彼自身の父と母、イギリス或いは将来性は、彼にとつては何も意味していなかつた。彼はこの家族を愛していた。トムを愛していた。そしてレニーも。そしていつも彼らと一緒にいたいと思つていた。このようにして彼は真の情熱を向ける対象を得たのであつた。(続)